

vol.
118
2022
Summer

市民活動情報誌

for Voluntary Network in Ohmi
Collaboration Paper

あいみー あいみー



〔特集〕

「地域をつくる。」ってなんだろう

～チーム永源寺の場合～

東近江市永源寺診療所所長
特定非営利活動法人チーム永源寺代表
花戸 貴司さん

▶紹介はP2

Contents

- 〔特集〕「地域をつくる。」ってなんだろう P2~4
- 人と地域とつながる事業所さん P5
- VIVA! BIWAKO P5
- 市民活動レポート P6~7
- 未来塾16期生の虫の目・鳥の目・魚の目 P7
- 応援インフォメーション P8



Ohmi Network Center

淡海ネットワークセンター

公益財団法人 淡海文化振興財団

<https://ohmi-net.com/>



特集

未来に…向かって…つなげる…つづける

「地域をつくる。」ってなんだろう ～チーム永源寺の場合～

「滋賀県にはどんな地域があるんだろう。」

「私たちの地域ってどうなっているの。」

都市部では地域の意識がますます希薄になり、中山間部は人口減少、少子高齢化が進み地域の存続が危ぶまれるような状況です。このような中、私たちに何ができるでしょうか。そこで、滋賀県内の地域でのユニークな取り組みや活動をご紹介し、何かしらのヒントになればと連載で特集を企画しました。

第一回目の今号は、東近江市の永源寺地域の「チーム永源寺」です。少子高齢化が進み、いわば近未来の日本の縮図のような永源寺地域での活動から、どんな糸口が見つかるでしょうか。

厚生労働省のアンケートによると、国民の60%以上が自宅で最期まで療養したいと願いながら、現実には約13%しかなく、同時に、約60%は自宅で最期まで療養することは難しいとも回答しています。※注

このような中、滋賀県東近江市の永源寺地域では自宅での看取り率が約50%といいます。少子高齢化が進み、いわば近未来の日本の縮図のような永源寺地域で、なぜこのような高い看取り率なのでしょうか。そこには「チーム永源寺」が大きな役割を果たしているようです。

「チーム永源寺」とは、医療福祉関係者、行政、地域住民など様々な人が連携し「いつまでも住み慣れた我が家で普通の暮らしを続けたい」と思う人たちの願いが叶うよう、安心して暮らせる地域づくりを目指し活動されている団体です。

今回は、代表の永源寺診療所所長の花戸貴司先生にお話を伺いました。

※注 厚生労働省「医療と介護の連携に関する意見交換(第1回)看取りについて 資料-2 参照

東近江市永源寺診療所所長

特定非営利活動法人チーム永源寺代表

花戸貴司さん

最初から決めないこと。

● 「チーム永源寺」ができたきっかけ教えてください。

花戸さん 少子高齢化の社会となり、医療の役割が変わって

きたことがあります。

例えば、結核などの感染症や妊娠・出産といった、人や病気を管理することが今までの医療でした。しかし、時代とともに生活習慣病や癌などが病気の中心となり、患者さんに薬を投与するだけではなく、生活指導をすることが医療の役割となっていました。その後、豊かな時代も重なって寿命は伸び、患者さんとの長いおつきあいが始まりました。さらに高齢化が



進む中で、認知症や障がい、高齢者の一人暮らし・老夫婦世帯が増え、医療だけではどうにもならない「状態」が増えました。この「状態」を支えようとすると、医療や福祉の専門以外の人たちの輪を広げていかないと対応できないぞ、ということからがスタートですね。

●メンバーコンポジションと活動はどのようにですか。

花戸さん ご近所さん、警察や消防、いろんな方たちがメンバーです。行政の方や民生委員さんなど異動や任期で入れ替えも多いですが、主としてだいたい20名ぐらいでしょうか。ネットワーク全体としては80名~90名おられます。普段から地域で顔が見える関係を大事にし、情報交換をしています。

活動は、最初にお話ししたように医療や介護のサービス以外の生活のサポートになります。この人にとって何が必要なのか、話し相手なのか、買い物の補助なのか、それによってメンバーが異なり、各々の活動となって広がっています。

●「チーム永源寺」からネットワークが広がり、皆で地域を支えている。先生が描いた形になっているのでは。

花戸さん いや、最初からこういう形にしたいと決めて出来たんじゃないんですよ。とりあえずやってみよう、と声をかけていくうちに今の形になってきました。足りない部分を追うと、そこを補うことばかりに目が向きます。そうではなく「この地域だからどんなことができるのか。」そこを一番に考えて、

いろんな人に声をかけ、「みんなで前に進んでいく。」ということをしていると、今の形になりました。必ずしも最初に思い描く形でなくていいと思います。

最後まで、自分の家で暮らしたい。

●さて、「チーム永源寺」ができて10年以上経ったわけですが、地域の変化はどうですか。

花戸さん 年をとり病気や認知症になつたりしても地域のなかで生活を続けたい思いが患者さんの中に多くあります。チーム永源寺がその一端をサポートするようになり、その結果半数の方は地域で最期を迎えられます。

また、同居できない事情のご家族も多数おられます。その方たちには「家族で介護ができなくても、地域で支えますから。」と、お伝えできるようになりました。これは、地域とチーム永源寺の連携が定着したからこそ、ご本人やご家族ともに安心感を持ってもらえるようになりました。

●仕組みが定着してきたということで、2020年に特定非営利活動法人として組織化されました。

花戸さん やはり継続的に運営できる組織が必要であると考えNPO法人にしました。しかし、組織はピラミッド型ではなく、逆三角形と思ってください。地域の人たち、チーム永源寺があつて、最後に専門家、「医療従事者」の私がいる。そんな組織です。



住み慣れた我が家で暮らし続けたい。その願いを皆で支えます。

これからの「チーム永源寺」

●チーム永源寺を中心に関わる地域を支える、地域をつくる。他地域でも真似をしたいところですが、なかなか難しいかと思います。アドバイスがあればいただけますか。

花戸さん 田舎は「地域」＝「コミュニティ」という形があるのでとてもやりやすいです。その一方で、都市部には多様な、そして重なりあうコミュニティが存在するので、それぞれのコミュニティにアプローチすることが大切だと思います。

そしてチーム永源寺のように最初から目標を「決めない」こと、まず「参加してもらう」ことからいろんな活動がはじまると思います。

profile

花戸 貴司さん

東近江市永源寺診療所所長
特定非営利活動法人
チーム永源寺代表



先生の著書



2000年東近江市永源寺診療所所長に着任。

在宅医療、地域医療に力を注ぐとともに在宅看取りを通して命の継承、地域のつながりの大切さを伝える。

特定非営利活動法人チーム永源寺代表。

著書に『ご飯が食べられなくなったらどうしますか? 永源寺の地域まるごとケア』(農山漁村文化協会)、など。

特定非営利活動法人チーム永源寺

設立／2020年4月

永源寺地域にて、いつまでも住み慣れた我が町、我が家で普通の暮らしを続けたいと思う人たちの願いが叶うよう、医療福祉関係者、行政関係者や地域住民が繋がり、職種や立場を越えて連携し、地域で安心して暮らしていくける地域づくりを目指し活動中。

●なるほど、ありがとうございます。最後にこれからのお話についてお聞かせください。

花戸さん 田舎なので、どうしても活動が高齢者に集中してしまいますが、子育て世代もいます。少子高齢化が逆転することはないですが、子育て世代も住みやすい地域にしていきたいですね。それぞれの世代がいてこそ地域ですから。「チーム永源寺」もそれぞれの世代へアプローチし、皆で活動しながら次の世代へ永源寺地域の素晴らしい伝えていきたいですね。

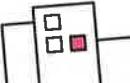
「安心して住み慣れた家で暮らし続けられる。」それは、冒頭のアンケート結果にもあるように日本人がほほ願っている思いです。それを「チーム永源寺」を中心に、皆でその願いを叶えるという「地域づくり」を、医療従事者のお立場である花戸先生のインタビューでお届けしました。

小さな集落だから、都市部では難しいと、つい思ってしまいませんか。花戸先生のお話にもありますように、さまざまなコミュニティが存在するのが都市部です。「スポーツ」であつたり「趣味」のサークル、「子育て」や「介護」などの仲間同士と、いろんなコミュニティが連携をとりながら広がつていけば、そこに思いもよらない「地域づくり」が生まれる可能性があります。そのひとつに今回のような「安心して我が家で普通の暮らしを続けたい」という思いが叶えられる「地域づくり」があるかもしれません。「チーム永源寺」の取り組みは、まさにその先進事例ではないでしょうか。

一度、周りのサークルや、仲間とともに、あなたの住む地域を眺めてみませんか。

地域で社会貢献

人と地域とつながる 事業所さん



「株式会社彦根麦酒」

材料も人も「オール彦根」のクラフトビールを!



荒神山の麓、目の前には琵琶湖が広がる自然豊かなロケーション。そこに建つ彦根麦酒の醸造所（ブルワリー）は、木や葦がふんだんに使われ、環境にやさしい工夫が施されています。木の香りとビール酵母のほのかな甘い匂いが漂うなか、営業ディレクターでありブルワーでもある豊村美久さんにお話をうかがいました。

まず、なぜこのような田園地帯に醸造所が、と尋ねてみると、ここは非農用地で20年以上も活用を検討されていたそう。いくつもの事業案が出るも、なかなか採用に至らず、それでも何とかこの土地を活用したいと希望する地元の人たちに滋賀県立大学、企業（彦根麦酒の親会社）が手を挙げ、地元の農産物が使って、雇用も生み出せ、若い人にも関心を持ってもらえることから「クラフトビール」を作ろうと、この地に醸造所が出来たそうです。

このようにスタートした彦根麦酒は、クラフトビールを作りたいから醸造所を作る。ではなく、「非農用地」の活用からのクラフトビール作り。よって、スタッフ全員が未経験で、ゼロからのスタートだったそうですが、未経験を強みに変え「地元のビールを作ろう」という想いをひとつに試行錯誤を重ね、今年オープンから一年を迎えられました。

現在は、材料すべてを地元産でまかなう「オール彦根」の

クラフトビールを目指し、大麦やホップの栽培をはじめ、長浜バイオ大学と連携し、ビールに適した彦根産の酵母も探しているそうです。これには地元の中高等学校の科学部も参加し、正に地元のみんなが作る「オール彦根」のクラフトビール。誕生が楽しみですね。

加えて、地域の特産物である「梨」、それも市場に流通できないものを敢えて使うことや、廃棄物として出る麦芽粕を、お菓子などに加工し直すなど、循環型のビール作りにも挑戦していきたいとのことでした。

かかわる全ての人たちの「チャレンジ」が詰まった彦根麦酒のクラフトビール。醸造所からの美しい景色を眺めながら、ぜひ味わってみてください！



ビールの種類も増えてきました。
丁寧に説明してくださいる豊村さん。

- 代表／橋本 健一 ●設立／2019年11月
- 連絡先／滋賀県彦根市石寺町1853
<https://hikonebrewing.jp/aboutus/>
- オンラインショップ／<https://hikonebrew.base.ec/>



びわ湖を味わう！

“湖魚料理”的新たな楽しみ方

鮎のスパイシーケチャップ和え

フナ

鮎



冬から春先にかけて、琵琶湖では鮎漁が行われます。卵持ちのメスは大半が鮎寿司を作るために買い取られ、オスはショキと言われる鮎の刺身の地元料理で楽しんでいます。鮎の身は色味も綺麗でこってりとした甘味がありとても美味しいお魚です。鮎にはゲンゴロウブナ、ギンブナ、ニゴロブナなど数種類いますが今回のお料理にはニゴロブナのオスの身を使いました。

【鮎の下処理】骨切り

鮎はとっても美味しい淡水魚ですが小骨が多いお魚です。骨抜きで取るのは困難なので、小骨ごと食べれるように、骨切りという一工夫さえすれば小骨を気にせず食べやすくなります。

- ①鮎を三枚下ろしにする（今回、皮はつけたまま）
- ②背骨に対してほぼ垂直くらいで3-5mm間隔で皮を切らない位置まで押し切りしていきます。（小骨を切っている音がします。）



材料(2人分)

・鮎の切り身	… 1匹分 (250g)
・醤油	… 大さじ1
・酒	… 大さじ1
・ニンニクチューブ	… 小さじ1
・片栗粉	… 大さじ2
・ケチャップ	… 20g
・ウスターソース	… 10g
・ハチミツ	… 5g
・チリパウダー	… 少々
・タバスコ	… お好みで
・水	… 大さじ1

作り方

- ①骨切りした鮎の身を2cmサイズに切り分ける
- ②ボウルに①とAを入れて揉み込む
- ③②に片栗粉をまぶし、180°Cの油で揚げる
- ④フライパンにBを入れ温めながら混ぜたら揚げた鮎の身を入れ、ソースと絡めて完成！

写真はタコスの具として使ったものです。
パンにサンドしたり、そのままおかずにも。



川瀬 明日望（琵琶湖とタパス）

近江八幡市沖島町の地域おこし協力隊として沖島の移住暮らし、同世代に向けた琵琶湖の魚の新たな楽しみ方等を考え、ビジュアル化し発信する事を目的に活動中。

OHISHIMA.TEX.MEX

文化・芸術

アートがつないでいく、 人も心も



「街かどアート展実行委員会」私たちは、障害のある方が創り出す陶芸・絵画等の作品（アート）の素晴らしさを、地域の方々と共に体感することで、障害のある方への意識変容を願って結成された実行委員会です。

主に彦根市内の社会福祉法人、NPO法人、当事者団体等11の団体で組織され、それぞれの強みを生かし助け合いながら活動しています。

障害のある方が生み出す作品が、地域の多くの方々と出逢えるよう、湖東圏域の行政機関、公民館、銀行、図書館等、身近な場所を巡回する形で「街かどアート展」を開催しています。

「文化芸術活動×共生社会」をコンセプトに、昨年度は6回の「街かどアート展」を開催する事ができました。予想以上に地域からの反響も大きく「このような機会を続けてください。」「観ていると気分が楽しくなります。」「銀行が明るくなりました。」「素晴らしい作品です！」「すごい力、感動しました！」「共生社会、大切なことですね。」等、多くのメッセージが寄せられ、作家やそのご家族・私たちの励みとなっています。

作品の一つ一つが来場者に語りかけ、心を和ませてくれる。そのような機会を自然な形で創り出せた事は、共生社会づくりの一翼にもなれたのかなと思います。

この活動を通して、作品の展示方法や法的な事等、私たちも様々な視点から多くの事を学ばせていただきました。

コロナ禍ではありますが、作家同士の交流や地域の方々との交流等、これから企画していくべきだと思っています。

【寄稿】
上田久美子さん
(NPOはぼハウス 地域協働室)



2022年度笑顔あふれるコーヒーショップ基金採択団体

街かどアート展実行委員会

●代表／若林 重一 ●設立／2021年8月

障がい者支援

ユニークな手法で 子どもたちの可能を広げる



一般企業から転職、発達障害などの障がいを持つ子どもたちの通所訓練所を設立した代表の大和幸子さん。その経験からどうか、うかがった放課後等デイサービス「なないろ」ではユニークな手法で子どもたちの変化と自立性を引き出しています。

その手法とは——。「パラダイムシフトコミュニケーション®」というコミュニケーションスキルを応用した「なないろメソッド®」といい、現在7つのプログラムがあるとお聞きしました。

例えば、『なわとびプログラム』。これは、人との距離感を取るのが難しい子どもが、他人が回すなわとびを跳ぶことで自然とその距離やタイミングを取れるようになる、といったプログラムです。いずれも子どもたちがストレスを感じることなく、楽しみながら変化していくという、聞いているとまるで魔法のようですが、確実にその結果がでるそうです。

さて、この独自のプログラムとともに「なないろ」では『本物を体験する』ことも大事にされています。合宿に出かける、買い物をする、ラジオ番組に出演するなど、施設の内外を通して様々な体験を重ね、子どもたちの可能を広げるとともに、これは、社会に出た時のシミュレーションも兼ねているそうです。「ここで取り返しのつく失敗をたくさん経験して、将来に生かしてほしいですね。」と大和さん。

最後に今後について尋ねると、「お母さんにも『なないろメソッド®』のような手法を提供していきたい」とのこと。「障がいがある子どもを持つお母さんは、特に自分を責めやすく心に負担をかけやすいので、そこに寄り添うアプローチができれば。」と話してくださいました。

きっと、「なないろ」の子ども同様に、お母さんたちもストレスなく生きやすいうように変化していく新しいメソッドが誕生することでしょう。

*『パラダイムシフトコミュニケーション®』とは、人が持っている言葉の背景や、行動に繋がる感覚を、深いレベルのコミュニケーションを通して、パラダイムシフトし、インスピライア（触発）を起こし、人が持つ無限の可能性とそれに基づく行動を、より軽やかに発揮させるコミュニケーション。「コミュニケーショントレーニングネットワーク®」のHPより抜粋。

放課後デイサービス「なないろ」

●代表／大和 幸子 ●設立／2014年4月
●<https://www.wkwn-nanairo.com/>

地域再生

「草津のあおばな」を取り戻せ！



皆さん、「草津市の花」をご存じですか。その花は「あおばな」といい、正式名「大帽子花」。つゆ草の変種だそうです。この花で絞った花汁の特性は水で消えること。この特性から友禅の下絵書きの染料に使われ、草津市のある集落ではたくさんのあおばな栽培農家があり、草津の地場産業の一つを担っていたそうです。しかし、着物の需要が減ると同時にあおばな栽培農家は減り続け、今では1軒に。この危機的状況に立ち上がったのが、今回お話を伺った特定非営利活動法人青花製彩代表の峯松孝好さんです。

峯松さんは、ふとしたことから、この「あおばな」の現状を知ることになるのですが、そこから「あおばな」を残したい、広めたいという気持ち一心に行動されています。その原動力の源は、とお聞きすると、「小さいころから動植物が大好きだったんです。それを『あおばな』で思い出した感じですね。」と笑う峯松さん。そこから現在まで、猛スピードで「あおばな」復活のため、商品化への研究や開発、新規事業の展開など試行錯誤を重ねてこられました。

そして、「この地域にしかない『あおばな』は、やはり地域で盛り上げ、復活させたい。」との想いに立ち戻り、NPO法人を立ち上げ、ご自身も「あおばな」農家になられました。設立したばかりで、本格的な活動はこれからですが、まずはたくさんの人に「あおばな」摘みを体験してもらいたいとのこと。「あおばな」が一面に咲く田んぼは、青く染まって本当に美しいそうです。これは一度見てみたいですね。

「あおばな」に魅せられ、先人より想いを託された峯松さん。「草津のあおばな」を取り戻す。青花製彩の挑戦は始まったばかりです。



特定非営利活動法人 青花製彩

●代表／峯松 孝好 ●設立／2022年2月
●<https://twitter.com/aobanaseisai>

Challenge



未来塾16期生の

虫の目・鳥の目・魚の目

地域の課題を発見し、解決の方策や活動を実践する「地域プロデューサー」が育つことを目指す「おうみ未来塾」。現塾生16期生は、ただいま滋賀県下において活動を展開中！その活動内容をグループごとにご紹介していきます。

第1回目は「Petit Refrain(プチ ルフラン)」です。

モノの循環から人のつながりへ！



PetitRefrain(プチ ルフラン)はフランス語でPetitは「小さい」、Refrainは「繰り返す」という意味です。地域の中でモノの循環から人のつながりを生む仕組みを作りたいと立ち上げたグループです。

私たちは利便性・経済性を優先する私たちの衣食住から大量の廃棄物が出て、それが自然の循環からはずれている場合が多いことに着目し、SDGsへの意識が高まりつつある今、「大変そう！めんどくさそう！どうしたらいいかわからない！」という人に向けて、何かできないかと考え、活動に取り組んでいます。

目指すのは、地域や個人で実践できる小さな循環(プチルフラン)モデルをつくること。そのPetitRefrainモデルを発信し、自分たちの住む地域の環境、エネルギー、エコな暮らしへの住民意識の変化につなげたい。そしてその小さな循環から住民同士の交流や地域文化や地域の魅力の再発見につながり、住民の地域への愛着心を育みたい。そんな想いで活動しますが、内容は自由発想♪個々のメンバーがやってみたいことを共有して応援し失敗を成功への糧に。私たち自身が素敵な人に出会い、つながり、吸収して、巻き込んで、面白がって、楽しめます。

PetitRefrainという言葉が滋賀のあちこちに浸透し「エコでつながりが生まれる活動」=「PetitRefrain」となるよう頑張ります。応援よろしくお願いします。

プチ ルフラン Petit Refrain

【メンバー】

代表／越後 美穂
澤井 二三夫
番田 雅子
伊東 紅仁子
青地 路子
木村 匡季



Summer Information

市民活動を応援

する淡海ネットワークセンターの事業をご紹介します。

募集

公益財団法人 淡海文化振興財団 賛助会員募集 クレジット決済でご入金 いただけるようになりました!

淡海ネットワークセンターでは、当センターの目的に賛同し、事業運営にご協力いただける「賛助会員」を募集しています。年会費は個人1口3,000円、法人1口10,000円です。豊かな社会をめざして温かいご支援ご協力をお願いいたします。なお、従来の入金方法に加えクレジット決済でもご入金いただけるようになりました。ぜひご利用ください。

*当財団への寄付は、税制優遇

(寄付金控除/損益算入)の対象となります。



お知らせ 労働者協同組合法の学習会

2022年10月1日、労働者協同組合法が施行されます。これに先立ち、淡海ネットワークセンターでは、2022年7月27日(水)に「労働者協同組合法」についての学習会を開催します。一般向けの学習会となります。多くのご参加お待ちしております。

「地域づくりを仕事にしませんか」

協同労働と労働者協同組合法学習会

日時 2022年7月27日(水) 13:30~15:30

場所 ピアザ淡海 滋賀県立県民交流センター
2階会議室207
オンライン同時開催

内容

●労働者協同組合法の概要

日本労働者協同組合連合会センター事業団
京滋事業本部 本部長 田中 紀代子氏

●事例団体

- ・企業組合労協センター事業団 草津地域福祉事業所 みんなの家
福山 かおり氏
- ・企業組合労協センター事業団 甲賀地域福祉事業所
上山 久美子氏
- ・広島市協同労働プラットフォーム「らばーろひろしま」
小暮 航氏
市民団体1~2例

新事務局長 着任のごあいさつ

淡海ネットワークセンター事務局長 南 圭子

この4月に淡海ネットワークセンター事務局長に着任いたしました南です。どうかよろしくお願ひします。これまで39年間、官庁勤めでしたので、まったく新しい世界に飛び込んだことになります。新しい経験、新しい人の出会いにワクワクしております。

先日の未来ファンドおうみの成果報告会では、市民活動団体の皆さんのが熱い想いに感動し、おうみ未来塾のグループ活動相談会では、塾生の皆さんの熱心で前向きなお話に引き込まれました。人口減少、少子高齢化が進む中、持続可能で活力ある地域社会が求められており、このような地に足の着いた地域活動や地域課題の解決に取り組む方々の存在は大変重要であり、ネットワークセンターとしても地域のために皆さんと一緒に地域のために頑張っていきたいなという気持ちでおります。また、現場にも足を運んで、いろいろお話を聞きたいと思いますので、その際にはどうかよろしくお願ひいたします。

編集後記

■「終活」という言葉がやっと馴染むようになり、自分の死について考えるようになってきたとは言え、まだ家族間での話ではないでしょうか。それを、今回特集した永源寺地域では「チーム永源寺」を中心に、地域の皆さんで共有されていることは本当に驚きました。そして、都市部では様々なコミュニティにアプローチすることが大切。とのお話に、地縁とは限らない人との繋がりは、正にこれから時代なんだろうな、と感じました。いずれにせよ、「ご飯が食べられなくなったらどうするか。」は、最後まで自分がどう生きるか。いつ死ぬか選べないからこそ、笑って泣いて自分の人生、生き切りたいなあと、改めて取材を通して思いました。

さて、今号より『VIVA! BIWAKO』と題して、沖島の地域おこし協力隊、川瀬明日望さんに琵琶湖の魚を使ったレシピを紹介いただくコーナーや、現未来塾生の活動をご紹介するコーナーがスタートしました。従来の特集や活動されている団体さんとの紹介とともに、おうみネットからいろんな声をお届けします!次号もどうぞお楽しみに。

(辻ゆかり)

未来ファンド おうみ 「未来ファンドおうみ」助成事業

滋賀県内で、地域や社会の課題解決やびわ湖等の環境保全に取り組むNPO・市民団体の活動に助成を行います。詳しくは下記ホームページをご覧ください。2023年度募集: 2022年11月(予定)

ホームページ <https://ohmi-net.com/jyosei/>
TEL 077-524-8440



この印刷物は大豆油インキを包含した植物油インキを使用しています。

Ohmi Network Center
淡海ネットワークセンター
公益財団法人 淡海文化振興財団

淡海ネットワークセンターは、県内の市民活動、NPOをサポート・ネットワークしています。

■情報交換誌「おうみネット」は登録・いただいている県内外の団体・個人のほか、次のところに配布しています。(50音順)
関西みらい銀行、京都信用金庫、県内公民館、県内公立施設、県内市民活動支援センター、県内社会福祉協議会、県内市役所・役場、県内図書館、県内中学校・高校・大学、滋賀県信用組合、滋賀県庁、生活協同組合コープしが、他

発行日／2022年7月1日 発行所／公益財団法人 淡海文化振興財団

〒520-0801 大津市における浜1-1-20 ピアザ淡海2階

TEL:077-524-8440 FAX:077-524-8442

<https://www.ohmi-net.com> E-mail: office@ohmi-net.com

開館日：市民活動ふらっとルーム／火～土曜日(火～金曜日の祝日は休館)

事務所／火～日曜日

淡海ネットワークセンターのHPは右記QRコードでご覧になれます。セミナー・助成金、イベント情報も掲載しておりますのでぜひご活用ください。

